

高等学校芸術科音楽履修生の授業に対する意識について ー選択動機に焦点を当ててー

芸術系教育サブプログラム(音楽)

山岸 香穂

【指導教員】 小野 和彦 森 薫 東浦亜希子

【キーワード】 高等学校 芸術科音楽 選択動機

1. 研究の背景

高等学校において、音楽の授業は選択制である。生徒は音楽、美術、工芸、書道の4つの芸術科目の中から1つを選択し、授業を受けている。高等学校で音楽を履修する生徒たちは、小・中学校で少なくとも9年間音楽を学んでいる。そのような生徒たちは、どのような理由で音楽を選択するのだろうか。学習者が選択に至った背景を把握しておくことは、教師が効果的な授業を設定するために欠かせない視点だと考える。

小・中学校の音楽科と比較すると、高等学校芸術科音楽を対象にした調査は管見の限り少ない。国立教育政策教育課程研究センター(2015)の「平成27年度高等学校学習指導要領実施状況調査生徒質問紙調査(音楽Ⅰ)」では、芸術科音楽Ⅰの目標に照らし合わせた音楽履修生の学習到達度が明らかになっている。一方で、音楽履修生の授業に対する意識などの実態は明らかになっていない。

以上のことから、芸術科音楽を履修する高校生(以下音楽履修生)が、どのような理由で音楽を選択したかについて明らかにする必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は2つある。第一に、高校生が芸術科目選択で音楽を選択する動機を明らかにすることである。第二に、音楽ⅡやⅢを継続して選択する高校生の選択動機を明らかにすることである。

3. 研究の方法

(1) 文献研究

高校生の科目選択動機に関する先行研究から、科目選択の要因を検討する。また、言語選択に関する先行研究から言語選択と動機づけの関わりについて検討し、音楽科教育への示唆を得る。

(2) 質問紙調査

第1学年から第3学年までの音楽履修生を対象に、音楽Ⅰの選択動機や、授業の好意度、授業外での音楽経験など、基礎的な情報を整理するために、質問紙調査を行う。

(3) インタビュー調査

「学習動機は学習者一人一人に関わるものである」(王

2017, p.74)ことから、個々の学習者に焦点を当てるためにインタビュー調査を実施する。(2)の調査結果より、質問紙調査の対象者の中から、数名を抽出し、半構造化インタビューを行う。選択前の授業経験などの個々の選択背景を聞き取り、改めて音楽選択動機を類型化する。

4. 先行研究の検討

4.1 科目選択動機に関する先行研究

高校生の科目選択理由について検討した研究は、管見の限りない。山崎(2015)は、全日制の高等学校を対象に科目選択と進路選択に関する調査を実施した。調査の結果から、「適性の因子」「人間関係の因子」「進路の因子」「必要性の因子」の4因子が科目選択に影響を与える要因であることが明らかになった。第1因子の「適性の因子」は自己の適性を考えて選択したことを示す因子である。これは、科目への自己適性、知的興味、好き嫌いを考慮したという項目からなる。第2因子の「人間関係の因子」は友人などの人間関係に左右されて選択していることを示し、第3因子の「進路の因子」は、将来の進路についてよく考えて選択していることを示す。そして、第4因子の「必要性の因子」は資格取得の必要性を考慮して選択していることを示す因子である。また望月・横井・市原(2007)は、総合学科高校を対象として科目選択と進路選択に関する調査を実施し、総合学科生全体として興味関心で科目選択を行う生徒が多いことなどを明らかにしている。以上のことから、科目選択は、個人の適性や興味が重視されやすいと考えられる。一方で、これらの研究は芸術科目の授業選択に焦点を当てていないという問題がある。

4.2 言語選択に関する先行研究

英語教育、とりわけ第二言語教育研究において、言語選択に関わる学習動機研究が盛んに行われている。これまで、学習動機研究は「なぜ学ぶのか」「何のために学ぶのか」という学習の理由づけに焦点が当てられてきた(鹿毛, 2013)。心理学分野では、このような動機を解明するものとして、期待価値理論や帰属理論などの様々な動機づけ理論がある。一方で、第二言語教育研究では、1つの動機づけの法則性が教室という複雑な環境を説明することは不十分であると指摘し、多様な観点で説明可能な詳細で適切な折衷概念が必要であると述べた(ドルニエイ, 2005)。

このように、第二言語教育が教室場면을想定した動機づけ概念の重要性に着目している点は、本研究にとって示唆深いものであると考えた。

第二言語教育研究における学習動機は、「なぜその言語の学習を始めたのか」というきっかけや、日々の教室の内での学習に向かう意欲、またその言語を通じて何をを目指すのかといった長期的な目標など、学習の起点から将来へと続く幅広い時間軸(野畑 2024, p.85)におけるものと定義される。ドルニエイ(2005)は、学習動機が学習者の属する文脈や時間の経過などにより変化するものであると述べ、学習動機には3つの段階があることを示した。まず、動機づけを生み出し、目標や取り組む課題の選択など、行動の開始に関わる、行動前段階の「選択動機づけ」(choice motivation)である。例えば、第二言語教育において「言語講座の登録」を動機づけるものである。続いて、目標達成までのあいだにとる行動を積極的に推進させ、保持する役割を担う、行動段階の「実行動機づけ」(executive motivation)がある。最後に、学習経過を学習者が回顧的に評価することに関わる、行動後段階の「動機づけを高める追観」(motivational retrospection)である。これらの3つの段階は円環的に機能している。さらに、3つの段階における動機づけの機能には違いがあり、動機づけに繋がる主な要因も各段階で異なる。

このように、学習動機がプロセスを持つものとして捉えると、「科目を選択する」という行為は、「選択動機づけ」によって動機づけられていると説明できる。ドルニエイの動機づけ概念は第二言語学習に限られたものであるが、学習の実践場面である教室と結びつけて動機づけを捉えている点や、音楽科教育も生涯学習を見据えた長期的な学習であるという点から、学校での音楽学習においてもドルニエイの動機づけ概念が援用できると考えた。

そこで本研究では、音楽履修生がなぜ音楽を選択するのかを明らかにするために、ドルニエイ(2005)の動機づけ概念を用いる。学習動機がプロセスを持つものとし、音楽履修生の選択以前の授業経験を捉えることで、音楽の選択動機を明らかにできるのではないかと推察した。なお、本研究における選択動機とは、「なぜ音楽を選択したのか」という学習開始時の選択動機づけのことを指す。

5. 調査1 音楽選択動機に関する質問紙調査

5.1 調査の概要

(1) 調査の目的

音楽履修生の音楽Ⅰ選択動機や、授業の好意度、学校外での音楽経験など、基礎的な情報を整理し、明らかにすることを目的として行った。

(2) 調査対象校について

① 調査対象校の概要

調査対象校のA高等学校(以下A高とする)は、埼玉県全日制の普通科と商業科を併設する中堅的な学校である。また、2024年4月から6月に筆者が実地研究Ⅱを行った実習

校である。

② 調査対象校のカリキュラムについて

音楽の履修方法は高校によって異なるため、ここではA高のカリキュラムについて述べる。

前提として、高等学校学習指導要領(平成30年告示)芸術編の第1章第4節3(1)では、「芸術のうち音楽Ⅰ、美術Ⅰ、工芸Ⅰ及び書道Ⅰのうちから1科目を全ての生徒に履修させるもの」と示されており、芸術Ⅰは必履修科目である。

(i) 普通科

A高普通科は、高校入学前に必履修科目である芸術Ⅰの選択を行う。この時点の選択は、4つの芸術科目の中から1つを選択する芸術科目選択である。

2年次は、文理選択(文系・理系の2つ)によって芸術の履修が異なる。文系に進んだ場合は、芸術Ⅱを継続で履修する。A高の場合芸術Ⅱ以降は、芸術Ⅰで選択した芸術科目と同じ科目を履修することになっているため、1年次に音楽Ⅰを選択していた場合は、音楽Ⅱを履修する。一方で、理系に進んだ場合は、カリキュラムに含まれていないため芸術の履修はできない。

3年次は、文理選択(文系・理系・文理系の3つ)によって履修が異なる。文系に進み、5つの選択教科の中から芸術を選択した場合のみ、芸術Ⅲを履修できる。文理系に進んだ場合は5つの科目から、理系に進んだ場合は4つの科目の中から芸術を選択した場合のみ、芸術Ⅱを履修できる。

つまり、普通科で生徒が音楽科を自ら選択するのは1年次(中学3年の3月頃)、3年次(高校2年の7月頃)である。1年次の選択は、音楽、美術、書道の中から1つを選ぶ「芸術科目選択」であり、3年次は他教科の中から芸術(音楽)を選ぶ「教科選択」である。

(ii) 商業科

商業科は、2年次から必履修科目の芸術Ⅰが始まり、3年次も継続して芸術Ⅱを履修する。商業科の場合、芸術Ⅱの履修も必修である。商業科で行う選択は、2年次(高校1年12月頃)に3つの芸術科目から1つを選ぶ「芸術科目選択」のみである。

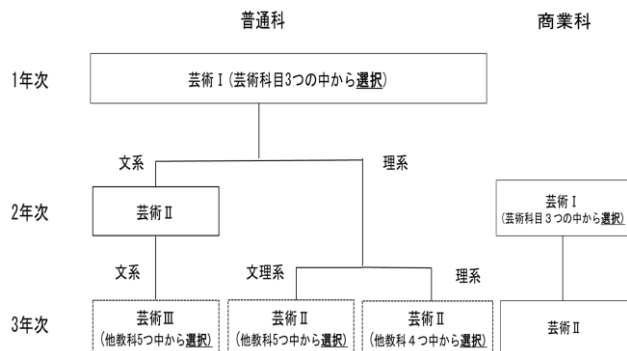


図1 A高のカリキュラム

よって、本研究でいう選択とは、普通科1年次・商業科2年次の芸術Ⅰの選択と、普通科3年次芸術Ⅱ・芸術Ⅲの選択を指す。また、芸術Ⅰの選択を音楽Ⅰ選択動機、芸術Ⅱ・Ⅲを音楽Ⅱ・Ⅲ選択動機とする。

(2) 調査対象と実施時期

調査対象者は第1学年から第3学年の音楽履修生175名である。音楽履修生全体の性別は女子51%(90名)、男子49%(85名)であった。また、音楽履修生の科目別内訳は、音楽Ⅰ履修生94名、音楽Ⅱ履修生71名、音楽Ⅲ履修生10名であった。

実施時期は2024年7月8日から9月2日の約2ヶ月間である。

(3) 調査の手続きと倫理的配慮

① 調査の手続き

まず、Google formsで質問紙を作成した。その後、A高等学校の音楽教諭に依頼し、質問紙調査のURLを生徒のタブレット端末内にある授業支援アプリ「Google classroom」に配信してもらった。音楽履修生はアプリ内にあるURLから回答した。

② 倫理的配慮

本研究は、A高等学校の学校長に、研究の主旨を文書と口頭で説明し、研究以外の目的で回収したデータを使用しないこと、個人が特定されないように配慮して発表することを伝え、許可を得た。対象者には、質問紙調査冒頭で、任意の調査であること、回答は研究目的以外に使用されることはないこと、データは匿名化され、個人は特定されないこと、授業の成績には一切関わらないことを説明した。質問紙調査は、回答・提出をもって協力同意を確認した。

(5) 調査の内容

質問紙は「基本属性」と「授業に対する意識」の大きく2つから構成された。「基本属性」では、履修科目、性別、所属(学年とクラス)、氏名、音楽系の部活動経験の有無、音楽の習い事経験の有無を尋ねた。「授業に対する意識」では、高校入学時の音楽選択動機、授業の好意度や、音楽の授業は自分にとってどんなものであるか、などを問うものを設定した。なお、音楽選択動機は、山崎(2015)の科目選択に影響を与える4因子を参照し、選択肢を作成した。調査の主な回答方法は、4件法と多肢選択法、自由記述法である。

5.2 調査結果1：調査対象者の概要

(1) 音楽履修生の男女比

音楽履修生全体の男女比は、女子51%、男子49%でほぼ1:1であった。次に科目別の音楽履修生の男女比について述べる。音楽Ⅰ履修生は94名であり、そのうち女子は43名(46%)であり、男子は51名(54%)であった。音楽Ⅰは男子の割合がやや高めであるが、音楽Ⅱは71名中41名(58%)

が女子、30名(42%)が男子という結果となり、女子の割合が高い傾向にあった。音楽Ⅲは履修者10名と少ない人数であるが、そのうち6名(60%)が女子で、4名(40%)が男子であり、女子の方が多い。このように音楽Ⅱから女子の割合が多くなる理由の1つとして、2年次に行われる文理選択が影響していると考えられる。音楽Ⅱ履修生のうち、45%が2年の文系女子である。この結果は、文理選択で理系よりも文系に進む女子が多いことが影響していると考えられる。

(2) 音楽履修生の授業外の音楽経験

音楽履修生の音楽系の部活動経験や地域の音楽活動、音楽系の習い事経験などの授業外での音楽経験の有無について尋ねたところ、175名中73名(42%)が音楽経験者であることがわかった。音楽Ⅰでは、96名中36名(38%)が経験者であり、音楽Ⅱでは71名中30名(42%)が経験者である。音楽Ⅰから音楽Ⅱの間に経験者は増えるものの、半数には満たなかった。しかし、音楽Ⅲでは10名中7名(70%)が音楽経験者であり、音楽経験者は半数以上であった。

音楽経験者の男女比も比較した。音楽経験、とりわけ楽器の習い事に関しては、幼児期の段階から女兒は男児よりも高い割合で実施されることが報告されている(ベネッセ次世代育成研究所,2013)。本研究の調査でも同じような傾向がみられるのだろうか。

本研究の調査では、音楽経験者73名のうち49名(63%)が女子であった。経験種別にみると、音楽系の習い事経験者48名中33名(69%)と、音楽系部活動・地域活動の経験者45名中31名(69%)が女子であり、音楽経験者は全般的に女子の割合が高いといえる。また、科目別音楽経験者の男女比についても述べる。音楽Ⅰの音楽経験者36名中20名(56%)が女子であり、音楽Ⅱは30名中25名(83%)、音楽Ⅲは7名中4名(57%)の割合で音楽経験者が女子であった。

以上のことから、本研究の質問紙調査においても性別によって音楽経験が異なっており、女子のほうが男子よりも音楽経験を享受しやすいといえる。

5.3 授業に対する意識

(1) 授業の好意度

まず、音楽履修生全体の授業の好意度について述べる。音楽履修生に「授業が好きか」について、「好き」「どちらかというが好き」「どちらかという嫌い」「嫌い」で回答を求めたところ、「好き」が175名中102名(58%)、「どちらかというが好き」が68名(39%)、「どちらかという嫌い」が5名(3%)、「嫌い」が0名(0%)であった。つまり、全体の約90%以上が音楽の授業を好意的に捉えているということである。一方で、あまり好意的に捉えていない生徒がいることも示された。

① 履修科目別好意度

ここでは、履修科目別の好意度について述べる。音楽Ⅰで「好き」と回答したのは94名中56名(60%)、「どちらかとい

うと好き」は 35 名(37%)、「どちらかという嫌い」は 3 名(3%)、「嫌い」は 0 名(0%)である。また、音楽Ⅱで「好き」と回答したのは 71 名中 42 名(59%)、「どちらかという好き」は 27 名(38%)、「どちらかという嫌い」は 2 名(3%)、「嫌い」は 0 名(0%)であった。つまり、音楽ⅠとⅡで「好き」「どちらかという好き」と回答している授業好き群は、97%であり、音楽ⅠとⅡでは授業の好意度に差がないといえる。音楽Ⅲは「好き」が 10 名中 4 名(40%)、「どちらかという好き」が 6 名(60%)、「どちらかという嫌い」は 0 名(0%)であり、音楽Ⅲ履修者全員が好意的に捉えているとわかる。

② 男女別好意度

音楽は、ジェンダー化された教科だといわれている(笹野 2013)。小学 5・6 年生を対象にした教科選好に関する調査では、「音楽が好き」という回答は、女子の方が男子よりも高く、有意な差がみられた(杉山 2008, 笹野 2013)。それでは、音楽を選択して履修している高校生の場合はどうなのだろうか。

男子で「音楽の授業が好き」と回答したのは 85 名中 47 名(55%)、「どちらかという好き」は 36 名(42%)、「どちらかという嫌い」は 2 名(2%)、「嫌い」は 0 名(0%)であった。つまり、男子で「好き」「どちらかという好き」と回答した授業好き群は、97%である。

女子で「好き」と回答したのは 90 名中 52 名(61%)、「どちらかという好き」は 47 名(46%)、「どちらかという嫌い」は 3 名(3%)、「嫌い」は 0 名(0%)であった。つまり、女子の授業好き群は 97%である。男女で好意的な層を比較した場合、差がないといえる。

以上のことから A 高の音楽履修生の場合、授業の好意度が性別と関係しているとはいえない。

③ 音楽経験別好意度

第 5 章 2 節で述べたように、性別と音楽経験は関係していることがわかった。ここでは、音楽経験の有無により、授業の好意度が変化するのかについて明らかにする。

まず、音楽経験者で「好き」と回答したのは、73 名中 50 名(68%)、「どちらかという好き」は 21 名(29%)、「どちらかという嫌い」が 2 名(3%)、「嫌い」0 名(0%)であった。つまり、音楽経験者で「好き」「どちらかという好き」と回答した授業好き群は 97%である。

次に、音楽未経験者で「好き」と回答しているのは、102 名中 52 名(51%)、「どちらかという好き」は 47 名(46%)、「どちらかという嫌い」は 3 名(3%)、「嫌い」は 0 名(0%)であった。つまり、音楽未経験者の授業好き群は 97%である。また、「好き」と回答した層を経験者と未経験者で比較すると、経験者の割合が高い。このことから、経験者の方が未経験者よりも好意的に捉えているといえる。一方で、「好き」「どちらかという好き」の授業好き群の割合は、経験者と未経験者ともに 97%であり、差はない。

以上のことから、A 高の音楽履修生の場合、授業の好意度

は音楽経験の有無と関係しているとはいえない。

このような結果となった理由は 2 つ考えられる。まず 1 つ目は選択制であることだ。複数の芸術科目の中からより好意的な科目を選択して、授業を受けられることが影響していると考えられる。2 つ目は、A 高の音楽教諭が生徒の音楽経験によらない授業をしているからだと考えられる。

(2) 選択動機

ここでは、芸術Ⅰの芸術科目選択で音楽選択した理由として、最もあてはまる選択動機について尋ねた。その結果、以下の図 2 のようになった。

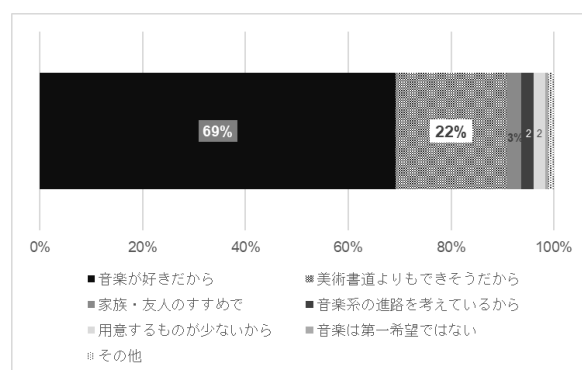


図 2 芸術科目選択で音楽を選択した理由

音楽Ⅰの選択動機として最も多いのは、「音楽が好きだから」であり、全体の 69%を占めている。次に多いのは、「美術・書道よりもできそうだから」という自己適性を考慮した回答である。「家族や友人のすすめ」などの周囲の意見による選択は 3%、「音楽系の進路を考えているから」という進路の影響による選択は 2%であった。また、「音楽が第一希望ではないが、音楽になってしまった」という回答や「転校してきて音楽しか選択できないと言われた」という回答も 1%あった。このように、およそその生徒の選択は第一希望通りになるが、希望通りにならない生徒がいたことも示された。

質問紙調査では、選択動機が複数ある場合を考慮できなかった。また、3 年生の音楽Ⅱ・Ⅲ履修生への選択動機については、質問紙作成の段階で選択動機の検討ができなかった。ゆえに、インタビュー調査でより詳細な音楽Ⅰ選択動機と音楽Ⅱ・Ⅲ選択動機を明らかにする。

6. 調査 2 音楽選択動機に関するインタビュー調査

6.1 調査の概要

(1) 調査の目的

音楽選択以前の授業の経験などの、選択に影響すると考えられる背景を調査し、語りから音楽Ⅰ選択動機、音楽Ⅱ・Ⅲ選択動機を明らかにすることを目的として行った。

(2) 調査対象と期間

インタビュー調査への協力可と回答した中から、9 名を選出した。対象者の概要は以下の表 1 に示した。なお、イ

インタビューの順番と表の対象者の順番は無関係である。

調査者	学年	学科	履修科目	性別	音楽Ⅰ選択理由
A	1年	普通科	音楽Ⅰ	男	書道と美術よりできそうだったから
B	1年	普通科	音楽Ⅰ	女	音楽が好きだから
C	1年	普通科	音楽Ⅰ	女	音楽が好きだから
D	2年	普通科	音楽Ⅱ	女	転校してきて音楽以外選択できないと言われたから
E	3年	商業科	音楽Ⅱ	女	音楽が好きだから
F	3年	普通科	音楽Ⅱ(選択)	男	音楽が好きだから
G	3年	普通科	音楽Ⅱ(選択)	女	音楽が好きだから
H	3年	普通科	音楽Ⅲ(選択)	男	音楽系の進路を考えてるから
I	3年	普通科	音楽Ⅲ(選択)	男	音楽が好きだから

表 1 調査対象者一覧

また、Dさんは「もし選択できたとしても音楽にした」と語ったため、音楽Ⅰ選択動機の分析の対象とした。

調査は、2024年11月15日から12月13日に実施した。

(3) 調査の手続きと倫理的配慮

① 調査の手続き

調査は対面で実施した。インタビュー調査前に、研究内容と研究倫理について文書と口頭で説明し、同意を得られた場合のみ同意書へ署名をもらった。インタビュー調査は、30分程度で、調査協力者の許可を得てICレコーダーに録音した。

② 倫理的配慮

口頭と書面にて研究の概要を説明した後、研究参加は任意であること、途中で辞退は可能であること、どのような回答をしてもその後の学校生活に不利益を被らないこと、匿名性の保持、個人情報の保護を説明し、研究同意書に署名を得た。

(4) 調査内容と方法

本調査では、調査対象者が自由に自身の経験や考えを語ることが出来るように、半構造化インタビューの形態を用いた。インタビューの主な項目は、中学校での音楽の授業について、中学校の授業で印象に残っていること、芸術科目選択の選択理由、高校の音楽の授業について、高校で音楽を選択してよかったと感じた場面などについて質問を行った。また、第3学年の音楽Ⅱ履修生であるFさんとGさん、音楽Ⅲ履修生であるIさんとHさんに対しては、音楽Ⅱ・Ⅲの選択動機を明らかにするために、音楽Ⅱ・Ⅲを選んだ理由についても追加で質問した。なお、質問の表現や順序は適宜変更し、必要に応じて質問を追加した。

(5) 分析方法

インタビューの録音内容から逐語録を作成し、語られた内容を要約してコードをつけた。コードの類似点、相違点を比較し、共通性や関連性のあるものを集めてカテゴリーを抽出した。

6.2 結果と考察

(1) 音楽Ⅰ選択動機

「芸術科目選択で音楽を選んだ理由」について質問を行った結果、調査者の語りから音楽Ⅰ選択動機を構成する9つに分類することができた。その結果が表2である。

芸術選択をする際、選択動機が複数あることがわかった。なお、1つの語りの中に複数の類型に関するものもあったため、件数は延べ数である(これ以降すべての類型化において同様)。

選択動機	件数(件)
A 美術と書道より得意	4
B 成績が良い	1
C 授業が楽しい・好き	2
D 音楽活動が好き	6
E 協働的な活動形態	3
F 音楽系の進路	1
G 教師の雰囲気	1
H 親の助言	1
I 友達の意見	1

表 2 音楽Ⅰ選択動機

先述の9類型の結果、各類型には以下のような語りが見いだされた。全ての語りに通し番号をふり、引用時は角カッコで通し番号を併記した。

A) 美術と書道より得意

音楽以外の芸術科目と比較し、その中で一番得意な音楽を選択したことを示すものである。美術と書道より得意に関する語りは4件あり、回答例を以下に示す。20件の回答のうち20%を占めている。

例

- 〔31〕「自分はちょっと他の芸術の書道と美術がちょっと苦手で。一番自分が取り組みやすいやつが音楽だったの。」(Aさん)
- 〔18〕「美術とかそんな得意じゃないんで、絵とか。だったら音楽って一番(自分の)力を生かせるかなと思ったんで、第1希望ですかね。」(Iさん)

このように他の芸術科目と比較し、自己適性を考慮して選択したことといえる。

B) 成績が良い

芸術科目の成績を比較し、1番成績がよいものを選択したことを示すものである。成績が良いに関する語りは1件あり、20件の回答のうち5%を占めている。

例

- 〔29〕「(中学校の)音楽は成績とれてましたね、得意でした。(高校でも)自分的に成績取れそうだし、音楽。」(Bさん)

このように、成績という教師からの評価が音楽に対する有能感へつながり、選択に至ったと考えられる。また、Bさんは中学校の音楽教師を「やったらやっただけ評価してくれた」と語っている。このことから、教師からの適切なフィードバックは、生徒の音楽に対する有能感へと繋がることも示唆された。

C) 授業が好き・楽しい

これまでの授業経験から、「授業が楽しい・好き」という教科に対する好意度を他科目と比較して、選択したことを示している。授業が好き・楽しいという回答は2件あり、20件の回答のうち10%を占めている。

例

- ・ [15]「やっぱり今まで(授業が)楽しかったとか、すごい好きっていうのがあったので。ただただ本当に好きだから、やりたいからみたいな、その気持ちだけで第1希望に。」(Fさん)

このように、これまでの音楽の授業経験を肯定的に捉えていることが選択に影響したと考えられる。Fさんは授業が楽しかった理由の1つとして、小・中学校の音楽教師の関わり方があったと語っていた。

D) 音楽活動が好き

歌を歌うこと、楽器を演奏すること、音楽を聴くことなどの音楽活動が好きで音楽の授業を選択したことを示すものである。音楽活動が好きに関する回答は6件あり、最も多かった。20件の回答のうち30%を占めている。

例

- ・ [16]「やっぱり楽器とかに触れてたいなって思って選びました。」(Cさん)
- ・ [43]「(音楽の授業には)やっぱり歌という、一番大好きなことがあるので。」(Iさん)

このように、歌や楽器演奏などの音楽活動が好きなことが選択の理由となっている。また、音楽活動が好きを選んだ調査者は、「未経験楽器にも挑戦したい(Cさん)」、「楽器に関する知識を得たい(Aさん)」、「高い声を出せるようになりたい(Fさん)」など、自分の好きな音楽活動に関する具体的な目標を持っていたことも明らかになった。

E) 協働的な活動形態

他の芸術科目と比較した際に、授業の形態が協働的なものであることが選択の決め手となったことを示すものである。協働的な活動形態に関する語りは3件あり、20件の回答のうち30%を占めている。

例

- ・ [30]「なんか1人で、その書道とかだと1人で黙々とやってるイメージあるんですけど、音楽だとみんなでやるイメージあって。楽しくできるかなっていう。」(Dさん)
- ・ [21]「美術は、何かその1人のその表現の最高点だけど、音楽はみんなでやるときの音楽の表現の最高点かなと僕は感じますね。みんなでやるんだったらこれがいって。」(Hさん)

このように、生徒は音楽の授業を「みんなで」楽しむという集団経験の場と捉えていることがわかる。[21]のように、音楽の授業は、「他者との協働的で一体的な体験」(笹野2024,p113)であるといえる。また、DさんとFさんは選択してよかったと思った時として、「音楽の授業がきっかけで今まで接点がなかった人とも話せるようになったこと」と語っていた。このことから、協働的な活動が交友関係も深め、授業の満足感にも繋がっていることも明らかになった。

F) 音楽系の進路

高校卒業後に音楽系の進路に進むことを考慮して選択したことを示している。音楽系の進路に関する語りは1件あり、20件のうち回答の5%を占めている。

例

- ・ [28]「音楽は割と性に合ってたから、何かしら音楽で生きていければいいなみたいなことは思ってた。」(Hさん)

このように、高校卒業後の進路先を見据えて選択を行ったといえる。

G) 教師の雰囲気

他の芸術科目の教師と音楽教師の雰囲気を比較して、選択したことを示している。教師の雰囲気に関する回答は1件あり、20件の回答のうち5%を占めている。

例

- ・ [47]「先生の雰囲気とかも、美術と書道と比べたら一番なんか楽しそうというか、楽しく教えてくれそうだなってのがあったんで。」(Iさん)

このように教師の雰囲気が選択に影響することが明らかになった。また、選択とは別に、高校の音楽の授業が好きな理由として「先生が優しい」「先生が面白い」という教師に関する語りがあった。

H) 親の助言

自分自身では決めきれず、保護者から助言を得て選択に至ったことを示すものである。親の助言に関する回答は1件であり、20件の回答のうち5%を占めている。

例

- ・ [19]「音楽行って得意を伸ばすか、新しいことに挑戦するかって(悩んで)。(親に)なんか(ピアノ)やってるんだし、音楽行けばって(言われて)、音楽選択しました。」(Cさん)

このように自分では決めきれない場合、保護者に判断を委ねることもあるようだ。

D) 友達の意見

芸術科目選択の際に、友達の意見が選択の決め手となったことを示すものである。友達の意見に関する語りは1件あり、20件の回答のうち5%を占めている。

例

- ・ [46]「まあ、その同中のHくんですよ。Hくんが音楽選択にしたんで。やっぱりその一緒に、心強い誰かがいないと、最初はちょっと厳しいかなと思ったんで。地元で顔見知りというか知ってる子がいたんで、つてのもありますね。」(Iさん)

このように、顔見知りの友達がいないことへの不安が選択に影響したと考えられる。また、Iさんは音楽Ⅰ授業開始時にも、「顔見知りがいない中で自信をもって歌ってよいのか不安」であったと語っていた。高校進学による環境や人間関係の変化が授業への不安となり、歌うことなど、表現のしづらさに繋がるということも明らかになった。

(2) 音楽Ⅱ・Ⅲ選択動機

「科目選択で音楽Ⅱ・Ⅲを選択した理由」について質問を行った結果、調査者の語りから音楽Ⅱ・Ⅲ選択動機を構成する4つに分類できた。これらの4つに分類した結果が表3である。

選択動機	件数(件)
A 授業が好き・楽しい	3
B 実技教科	2
C 友達の意見	1
D 音楽系の進路	1

表3 音楽Ⅱ・Ⅲ選択動機

音楽Ⅰ選択動機にはなかった新たな選択動機を太字で示した。音楽Ⅱ・Ⅲは他教科からの選択であるという、音楽Ⅰと違った側面が分類の結果にも出ている。なお、音楽Ⅰ選択動機と同じ類型で、先述の語りの内容に差異がないものに関しては回答例を割愛する。

A) 授業が楽しい・好き

教科に対する好意度から選択したことを示している。授業が楽しい・好きに関する語りは3件あり、最も多かった。

B) 実技科目

他教科と比較し、唯一の実技科目であったため選択したことを示している。実技教科に関する回答は2件あった。

例

- ・ [81]「(他の選択肢が座学ばかりなので、)その中で音楽っていうか芸術が、もうめっちゃめっちゃ輝いてて。なんかいいんですか、取っちゃってみたい。なんか楽っていうか、心を休める授業が欲しかったんですよ。安らぎ、そういう感じ。」(Iさん)
- ・ [49]「あと音楽(芸術)を選択すると、テストの科目が1個減るっていうのもあって。」(Gさん)

[81]のように音楽が実技教科であることによって、他教科の授業との気分転換になることや、[49]のように、音楽は実技テストであるため、定期テストの負担が減ることが、選択へつながることが明らかになった。

C) 友達の意見

科目選択の際、友達の意見が決め手となったことを示すものである。友達の意見に関する語りは1件であった。

例

- ・ [37]「普通に今やってる子たちと今一緒に音楽受けてる子たちとも、同じクラスとかだったんで話して、音楽やる？みたいな、やろう一緒にやろうみたいな感じで、音楽にしました。」(Fさん)

また、Fさんは仲の良い友達と選択したい理由について、「歌っていて音を外してしまったときに、友達同士だと笑いになるが、知らない人達だと気まずいから」と語っていた。また、本来歌うことが好きであるが、知り合いがいない場合は歌うことも嫌になってしまうとも語った。このように人的環境によって、意欲を失うこともあるということが明らかになった。また、進学だけでなく、進級などのクラス替えのタイミングにも、生徒は周囲との人間関係に不安を感じやすいといえる。

D) 音楽系の進路

高校卒業後に音楽系の進路に進むことを考慮して選択したことを示す。音楽系の進路に関する語りは1件あった。

7. 総合考察

本研究の目的は、高校生が芸術科目選択で音楽を選択する動機を明らかにすることと、音楽ⅡとⅢを継続して選択する高校生の選択動機を明らかにすることであった。

質問紙調査の結果からは、音楽履修生の属性が明らかになった。音楽履修生は授業に対して好意的な集団であり、授業の好意度は性別や音楽経験は、ほとんど関係していないことが示された。音楽Ⅰ選択動機に関して、「授業が好き」と

いう授業の好意度に考慮した選択が69%と最も多く、「美術と書道より得意」と自己適性を考慮した選択が22%と次に多かった。これらから、多くの履修生が教科の好意度と自己適性で選択していることが明らかになった。また、周囲の影響や進路の影響の割合は少なく、芸術科目選択は周囲や進路の影響をうけにくいことが示された。

インタビュー調査では、音楽Ⅰ、音楽Ⅱ・Ⅲ共に1人の語りから複数の選択動機が抽出できたことから、科目選択・教科選択に際して、多数の選択動機が影響していたことが明らかになった。音楽Ⅰ選択動機は、語りから「A 美術と書道より得意」「B 成績が良い」「C 授業が好き・楽しい」「D 音楽活動が好き」「E 協働的な活動形態」「F 音楽系の進路」「G 教師の雰囲気」「H 親の助言」「I 友達の意見」の9つに分類できた。質問紙では得られなかった新たな選択動機は「E 協働的な音楽活動」と「G 教師の雰囲気」であった。また、音楽Ⅱ・Ⅲ選択動機は「A 授業が楽しい」「B 実技教科」「C 友達の意見」「D 音楽系の進路」であった。音楽Ⅱ・Ⅲの選択は、音楽Ⅰと違い、他教科との選択であるため、自己適性や音楽特有の活動形態による選択は行われていなかった。ここでは、実技科目かそうでないかを主軸として選択したことを示す「B 実技教科」という新しいカテゴリーが抽出された。

さらに、インタビュー調査の中で、複数人から「中学校の授業との違い」に関する語りがあった。「中学校の頃は周りが恥ずかしがって声を出さなかったりするが、高校は音楽選択というだけあって、みんながちゃんと歌ってくれるから自分も気持ちよく歌える」、「中学だとバカにされるようなことが、高校ではないから、のびのび表現できて楽しい」、「みんなが授業を楽しそうに受けているから、自分も楽しく受けられて好き」といった、周囲の履修者の意欲的な取り組み方が、自身の授業への意欲に繋がっていることが示された。選択動機では「友達の意見」の影響は少なかったが、上記の語りから履修者は、周囲の反応を敏感に察知していることがわかる。また、「協働的な活動形態」のように、生徒は音楽の授業を「みんなで」楽しむもの、表現するものという集団経験の場と捉えていると考えられる。したがって、表現する上で周囲との関係性は特に重要である。このことから、学習開始時には、履修者同士がお互いのことを知ることができるようなワークを実施するなど、生徒が表現しやすいような環境づくりをすることが重要であると考えられる。

8. 今後の課題と本研究の限界

今後の研究には、以下3つの課題に取り組む必要がある。

1点目は、インタビュー調査者の偏りである。本研究のインタビュー調査者は、音楽の授業が好きであり、人前でのパフォーマンスも苦手ではない生徒が多い傾向が認められた。また、音楽Ⅱ・Ⅲ選択動機の調査対象は4名と少なかったため、更なる調査が必要である。

2点目は、音楽選択動機の調査対象が音楽履修生のみだった点である。今後は、音楽を選択しなかった高校生を対象に調査を進めることで、音楽選択動機の多角的に明らかにす

ることができる考えた。

3点目は、調査対象校が1校だったということである。高等学校には普通科、総合学科、専門科など様々な学科が存在する。さらに、学校の進路状況によって、音楽の授業に対する生徒の学習観は異なると考えられる。よって、本研究で得られた知見は一般化するには不十分であろう。今後は、調査対象を広げて、選択動機の検討を行う必要がある。

謝辞

本研究を行うにあたり、調査にご協力くださいましたA高等学校の皆様にご心より感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 王俊(2016)「学習開始時までの学習動機に関する一考察：中国にける日本語双学位学者を対象に」『国際文化研究』22, 73-85.
- 鹿毛雅治(2013)『学習意欲の理論—動機づけの教育心理学』金子書房.
- 国立教育政策教育課程研究センター (2015)「平成27年度高等学校学習指導要領実施状況調査 教科等分析と改善点(音楽Ⅰ)」, 国立教育政策教育課程研究センター, https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shido_h27/h27/17h27seito_ongaku.pdf(最終閲覧日 2025_01_30).
- 笹野恵理子(2013)「学校音楽文化とジェンダー分化—子どもたちの学校音楽経験にみられるジェンダー差異の様相—」『音楽教育ジャーナル』17(1), 90-97.
- 笹野恵理子・学校音楽文化研究会編著(2024)『学校音楽文化論：人・モノ・制度の諸相からコンテクストを探る』東信堂.
- 杉山知子(2008)「音楽科授業における子どもの嗜好とその変化—小学校5・6年生の場合—」『美作大学・美作大学短期大学部紀要』53, 85-95.
- ゾルタン・ドルニエイ (2005)『動機づけを高める英語指導ストラテジー35』(米山朝二, 関昭典訳)大修館書店.
- 野畑理佳(2024)「日本語学習動機研究の動向—質的研究を中心に—」『日本大学院総合社会情報研究科紀要』25(1), 85-100.
- ベネッセ次世代育成研究所(2013)「第1回幼児期から小学1年生の家庭教育調査報告書」基本集計表：幼児期版 https://benesse.jp/berd/jisedaikenn/research/research_22/pdf/research22-10.pdf(最終閲覧日 2025_01_30).
- 望月美和子・横井敏郎・市原純(2007)「総合学科高校の科目選択と進路選択に関する調査研究」『公教育システム研究』6, 55-78.
- 文部科学省(2018)『高等学校学習指導要領解説 芸術(音楽, 美術, 工芸, 書道)編 音楽編 美術編』.
- 山崎保寿(1995)「普通科高校生における選択科目の決定要因と進路意識の関係に関する研究—学校の属性および生徒が受けた教育程度を視点として—」『学校経営研究』20, 101-111.
- 山崎保寿(2015)「教育課程における高校生の科目選択および進路意識に関する研究—理数科および普通科生徒の比較を中心として—」『教科開発学論集』3, 13-21.